

皆さま方の菩提寺「善導寺」の宗旨・浄土宗について

当寺は、昭和五十四年館林市の都市計画により、現在地に移転再建し、現在に至っておりますが、移転後新入檀の方々も増えてまいりました。「菩提寺の宗旨・浄土宗について、実はよくわからない。少しくわしく教えて欲しい。」と言う声が聞こえてきます。そういう方々には入門編として、そんなこと知ってるよ、という方々にはおさらいの意味で、お念仏をお称えしていく助けとして、お読みいただきたいと思えます。

◎宗祖法然上人（しゅうそほうねんしょうにん）の「一生

法然上人は、平安時代末の一・三三（長承二）年四

月七日、美作国（みまさかのくに）久米南条（くめなんじょう）稲岡庄（いなおかのしょう・今の岡山県久米南町）に、父漆間時国（うるまのときくに）・母秦氏（はたうじ）の子として生まれ、幼名は両親の深い思いにより、智慧第一と言われる勢至菩薩にちなんで「勢至丸（せいしまる）」と名づけられました。

平和な日々が続いていましたが、勢至丸九歳のとき押領使（おうりょうし・治安維持の業務を行う役人）であった父時国公は、ある夜反体制武士団の夜襲を受け、深手（ふかで）を負いその臨終に際し、勢至丸に「仇討ち等

考えずに、仏の道に進むように」と遺言して息をひきとりました。

時国公は、あだ討ちの連鎖を断つ事を願って遺言し、これが勢至丸・後の法然上人が仏道を志すきっかけとなったのです。

父の遺言に従って、勢至丸は、叔父の観覚（かんかく）が住職を勤めていた那岐山（なぎさん・現、岡山県奈義町）菩提寺（ぼだいじ）に趣（おもむ）き、僧としての勉強をはじめます。

類（たぐ）い稀（まれ）れにみる聡明な勢至丸が、次々に教えを吸収していく相（すがた）をみて観覚は、その才能に驚き、当時仏教の最高学府であった比叡山（ひえいざん・天台宗延暦寺のある山塊）にすすめることになりました。そしてこの事は、母秦氏との永遠の別れともなっており、まいました。

（バラ・バレリーナ）

勢至丸は比叡山に入山し、十五歳（一説に十三歳）で正式に僧となり、めきめき学問を身につけていきましたが、僧でありながら、学問による出世を求める周囲の風潮に疑問を感じ、十八歳のとき、比叡山の別所黒谷（くろだに）



に隠棲していた叡空（えいくう）の弟子になりました。もともと黒谷は比叡山の中でも隠遁した僧が求法（ぐほう）の生活を送るところでした。

叡空は勢至丸に、比叡山での最初の師である源光（げんこう）と、自らの名前の一字をとって、法然房源空（ほうねんぼうげんこう）の名を与えられました。

それからの二十年、法然上人は、全ての人が救われる仏道を求めて真剣な修行を続け、あらゆる經典や書物を経蔵に籠って読み進めました。

そして遂に唐（とう・中国）で浄土教を大成した善導大師（ぜんどうだいし）の言葉に出会い、念仏による救いを確信するに至ったのであります。

善導大師が『観無量寿経（かんむりようじゅきょう）を注釈した『観経疏（かんぎょうしよ）』という書物には、次のように書かれています。

「一心に阿弥陀仏の名を念じることが極楽浄土への往生がかなうまさしき行である。それは阿弥陀仏の本願に従うことなのだから」、「阿弥陀仏の名を念じるとは、口に名号を称えることにほかならない」と。

時に法然上人四十三歳、一一七五（承安五）年三月のことでした。この書を二度三度読み返した上人は、「阿弥陀仏の名を称えれば、本願によって必ず往生ができる」との確信を得たのです。

やがて、上人は比叡山を下り、現在の総本山知恩院（そうほんざんちおんいん）の地に草庵を構（かま）え、人々に「もつぱら南無阿弥陀仏と称えなさい」とお念仏の教えを説（と）きだしました。

「お念仏を称えれば、一人も漏（も）れることなく救われる」というこの教えは、当時の社会にあつて画期的なものでした。上人は貴族や庶民、出自（しゅつじ）・生れ、出所（しゅつじょ）を問わず多くの民の帰依（きえ）・信じて疑わぬを受け、お念仏の声は京の街中に大きく広がっていきましました。

京都・大原の勝林院（しょうりんいん）では、法然上人と他宗僧侶との談義（だんぎ・物事の道理を説き合ひ聞かせること）と、世に云う大原談義（おおはらだんぎ）もおこなわれました。

しかし、お念仏の広まりに危機感を抱いた他の仏教教団から、念仏停止（ねんぶつちようじ）の訴えがなされ上人四国流罪という事件がおこり、時に上人七十五歳教化止まることなく、流罪先の土地でもお念仏の布教に力を尽くされました。

一二一一（建暦元）年、許されて京に戻り、翌年正月罹病、病床の中で、お念仏信仰の要義『一枚起請文』を記した後、一二二二（建暦二）年正月二十五日往生されました。御年八十歳でした。

密阿弥陀仏の救い

(浄土宗の教え・ひたすらにお念仏)

浄土宗は阿弥陀仏の本願(ほんがん)を信じ、心から極楽往生を願って、「南無阿弥陀仏」お念仏を称える日々を送ることを説く教えです。

ただひたすらに、お念仏を称えることを根本にすることで「専修念仏(せんじゅねんぶつ)」の教えともいわれています。

そこで、阿弥陀仏とは、本願とは、お念仏とは何か、そして極楽浄土とはいったいどんな処なのでしょう。先(ま)ず浄土とは、仏(ぶつ)・仏陀の略で、真実を覚った人で超人的存在の意、又釈尊を指している場合もある)が建立した世界のことです。

仏教では、仏は無数にあり、それぞれの浄土で人々を教え導いている、と説かれています。その中で、誰もが生まれることができる処が、極楽と名付けられた阿弥陀仏の浄土なのです。その名の由来は『阿弥陀経(あみだきょう・浄土三部経の二)』に「そこに生きる者には一切の苦しみなく、ただ楽のみある」から……と説かれています。

極楽は西方へ十万億の浄土を超えた彼方にあるといえます。換言すれば、無限の彼方です。しかし、一方で、「阿弥陀仏は、ここを去ること遠からず」とも説か

れています。これは、阿弥陀仏の本願を信じ、念仏を称えれば、死に臨んで極楽に瞬時に生まれさせていただけることが、できるということであります。そして、極楽に生まれることを、「往生(おうじょう・生まれ行くことで死ぬことではない)」というのです。

『無量寿経(むりょうじゅききょう・浄土三部経の二)』には、阿弥陀仏が覚(さと)りを開き、極楽浄土を建立された由来が詳しく説かれています。

——遠い昔のこと、法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)という修行者がいました。菩薩はすべての人々を救いたいとの願いを起(こ)し、二百十億もの浄土の様(さま)を具(つ)ぶさに観察しました。そして、それらの長所と短所を見極め、全ての者を救うため

にはどのような浄土がよいのか、思惟(しゆい・考えること)を深め、五劫(ごこう・極めて長い時間を表す単位、一劫については後述)という途方もなく長い時間をかけ、ついにその願と誓いを四十八の項目にまとめ、修行を重ねて、今から十劫の昔に、その全てを実現して仏(ぶつ)になりました。

その仏が阿弥陀仏であり、その浄土として築かれた

(蓮・白雪公主)



のが極樂であります。つまり、極樂はあらゆる浄土の長所を選んで築かれた所であり、最も優れた浄土であるといえるのです。

阿弥陀仏の「阿弥陀」とはインドの言葉で、無限の寿命を持つもの、即ち無量寿（むりようじゆ）、又、無限の光をもつもの、即ち無量光（むりようこう）と言う意味があります。前者をアミターユス後者をアミターバといつてこの二つを兼ね備えています。

阿弥陀仏は遙かな過去において仏となり、無限の未来まで救いの手を差し伸べる仏であり、その救いの光は、何にも遮られる事がなく、無限の輝きをもつ仏といえるのであります。

阿弥陀仏がその修行時代にたてた願と誓いを「本願（ほんがん）」といい、四十八項目あることから「弥陀の四十八願」といわれています。そしてその十八番目に「譬え僅か十遍でも念仏を称えたならば、必ず極樂への往生をかなえよう」とあり、これを「念仏往生の願」といい、お念仏の別称として、「本願行」、「本願念仏」などのことばがあるのは、これに由来しています。

南無阿弥陀仏の「南無」とは、阿弥陀仏を心から信じてたよりすがら、ということですが、

ですからお念仏は、「阿弥陀仏のはからいにすべてまかせます」と言う意味になります。

よく耳にする「他力本願」と言う言葉がありますが、これは単に他人の力に任（まか）せるということではなく、「阿弥陀仏の本願を信じ、念仏を称え、極樂に生れることを確信する」ことにより、安心（あんじん・仏の教えによって、心の平和を得て動じないこと、又それによって到達した境地のこと）が得られ、この世の中で明るい安らかな毎日を送れるようになるのであります。

【註】

一劫 〓 極めて長い時間を表す単位で、芥子劫（けしこく）と払石劫（ふっしやくこう）の二説がある。芥子劫は、縦横高さ四十里（約一六〇km）の城に芥子粒を満たして、三年ごとに一粒を取り去り、全て取り尽くすに至る時間を一劫という。払石劫は、四十里四方の岩山を、天人の薄い衣で三年に一度ずつ払拭し、その岩山が摩滅し尽すに至る時間を一劫とする。